

戀愛作法

吉行淳之介

講談社

吉行淳之介
恋愛作法



講談社

恋愛作法

定価 380円



昭和41年 3月20日 第1刷発行

著 者 吉 行 淳 之 介

発 行 者 野 間 省 一

発 行 所 株式会社 講 談 社

東京都文京区音羽町 3 / 19

電話 (942) 1 1 1 1 (大代表)

振 替 東 京 3 9 3 0

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 有限会社大光堂

新版のための序

この本は、むしろ「恋愛不作法」と名付けたほうがよろしいかもしれません。この本の中で私はまず、「恋愛」というものに、泥を塗りつけることからはじめました。しかし、汚すために泥を塗りつけたわけではない。女性のための美容術として、全身に泥を塗りつけるものがあると聞きますが、それに似た心持で、私は「恋愛」というものに泥を塗りつけた。

もっとも、その泥を洗い落したとき、一層かがやかしい裸身があらわれ出る筈なのが全身美容術なのであります。私が、私の本の場合、泥を落したときかがやかしい恋愛のすがたが現われてくるか、どうか。その点はかなり怪しいと言わなくてはなりません、しかし、「恋愛」というものをあまりにロマンチックにあるいはセンチメンタルに考えること

には、弊害のほうが多いといえましょう。そういう考えの持主は、とかく不幸になりやすい。(なぜそうなのか、それはこの本を読めば分る)この本は、そういう考えの持主にたいしての予防注射の役目を果たすとおもうので、その点、実用的価値もあるわけです。

この本は、八年ほど以前に出版になった「恋愛作法」「青春の手帖」、及び「浮気のすずめ」から抜粋再編集したものを中身になっています。当時私はこの種の文章をたくさん書きましたが、以後はほとんど書いておりません。書いても同じ論旨の繰返しになるからで、したがって現在も私は同じ意見をもっているということになる。男と女とのあいだの本当のところは、風俗的アクセサリを除いては、人類発生以来すこしも変わっていないのです。

昭和四十一年早春

著者

恋愛作法 目次

新版のための序

I 恋愛作法

告白について

陶酔について

舞台装置について

贈物について

会話について

43 35 26 19 11

Ⅱ 男の眼

あいびきについて	52
結婚について	60
倦怠について	68
恋の正体について	76
美醜について	84
仕事と恋愛について	93
誘惑について	101
愛と性について	109
嫉妬について	118
失恋について	126

上半身は参加するか
代償行為について

洞窟の女王たち

亭主野郎と女房たち
痛しかゆしのこと

今とむかし 男と女

千人斬りの英雄たち

瞬間的恋愛について

例外か例外でないか

恋の保存法について

ガーター作戦のこと

すりぬけ すりぬけ

自由をわれらに

うらみはふかいぞ
 乙旗を掲げましょう
 欲求不満の功罪
 つまるかつまらぬか
 風が吹きぬけてゆく
 それを掴むためには
 フグは喰いたし
 取り上げられた乳房
 本気のぬけがら

243 238 233 228 223 218 213 207 202

戀愛作法

I 戀愛作法

告白について

「恋」とは何でしょう。しかし、そのことは簡単に説明できることではありません。そう、昔の人が言った良い言葉があります。「恋、この定義できぬ、懐しい怪物」その言葉を、まず冒頭に掲げておいて、これからゆっくりその、正体を探ることにしましょう。

自分の恋情を自分の内だけにとどめず相手に知らせるためには、「愛の告白」が必要です。そして、「愛の告白」にもいろいろあります。もともと原始的で且つ一般的なのがアイラヴユーという言葉で、この言葉を我が国に移し植えるには何と翻訳したらよいか、などと考える向もありそうですが、ちょっと待って下さい。映画などで見ていると、アイラヴユーという言葉がささやかれたときには、二人の間には必ず一つの行動が起っているようです。接吻とか抱擁とか少なくとも手を握り合うとか、そういう行為が行なわれると殆ど同時に、その行為の伴奏のように、アイラヴユーという言葉がささやかれているようです。従って、この言葉を翻訳して「ワタシハアナタヲアイシマス」では、とても伴奏音楽にはなりません。「スキ」あるいは溜息だけの方が、元の形に近いわけです。

しかし、これはあくまで伴奏であって、告白の言葉ではありません。それでは何が「愛の告白」でしょうか。このごろでは、接吻とか抱擁とかあるいは手を握る行為自体が、告白のしるしという形になることが多いようです。そして、その行為に入るキッカケは、ごく些細なことで、又それによって

二人の性格なども分ろうというものです。

例えば、お互に心の中で想い合つて「色に出にけりわが恋はものやおもうとひとの間うまで」といった状態になっている二人ならば、ちょっとした眼の動き、あるいは眉の動きがキッカケになることもありましよう。

あるいは、はずかしがりの二人ならば、案外途方もない言葉のやりとりがキッカケになることもありましよう。例えば、

「僕の家庭の柿ね、今年はたくさん実が成つたよ」

「あら、わたしの庭の柿の木も、たくさん実が成つたわよ」

それがキッカケで接吻、ということだつて無いとは申せません。

あるいは又、こういう組合わせがあつたとします。女性の方は驕慢な性格で、相手の男を好きなのに（あるいは好きだから、と言つた方が正確かもしれませんが）ことごとくにサカライます。そういう場合、男の方がその女性の頬をおもい切りピシヤリと撲ることがキッカケとなつて接吻、ということも起り得ることです。アメリカ映画で時々見る場面です。もつともこの方法は、よくよく女性の気持を見定めてからやらないと、撲られた女性がおまわりさん呼びに行つたりすることになります。

右に述べた例は、いずれも間わず語りに心が通ひ合つている場合で、放つて置いても成るようになる場合です。

ところが、「愛の告白」の具合によつて、それほどでもなかった相手の心を動かすことだつて起らないことはありません。それが恋というものの微妙な点です。あるいは又、一度告白し合つた恋でも、時折「愛の告白」を繰返すことによつて、再確認しなくてはならぬ場合もあります。それが恋と

いうものの難しい点です。「神聖な恋愛にカケヒキは無用」などと一概に言ってしまうことではありません。

今の世の中では、恋愛というものは大そう入り組んだ形を示しています。極端な言い方をすると、「愛なんか少しもない二人同士の間で、技巧で恋を産んでゆくのが新しい時代の恋愛である」などと言うくらいです。しかし、そういう言い方はやや行き過ぎというものでしょう。

いや、そればかりでなく、私は少々大人の恋愛を頭に置きすぎているかもしれません。「恋を恋する年頃」の人もたくさんいることを思い出すことにしましょう。「恋を恋する年頃」、つまり、恋愛というものにバクゼンとしたあこがれを抱いている年頃というものがあるものです。そういう場合、実際にその女の子の前に、あこがれの対象がはっきりした男の姿をして現われて、手を握ったりなどしたら、その女の子は悲鳴をあげてしまうかもしれません。

さて、ここで私は「恋のカケヒキ」を伝授する筈ですが、このカケヒキの対象となる「恋」をどこらあたりに規準を置いたものか……。ちょっと、一人のお嬢さんを捉まえて訊ねてみることにします。そのお嬢さんは、二十歳、中流家庭の子女で、十人並あるいは美人といってもよいか、といった位の健康な女性です。

「君は、ダンスパーティーだとか、彼氏だとか言っているけれど、つまり、君が相手の男性になんとか好意的な視線を向けたとき、相手の男がニコリ笑いかえし、一緒にお茶でも飲みましょう、ということになって、さてその男と一緒にいる時間が楽しければ、それで、わが恋成れり、ということになるのじゃないか？　もしもその男が、いくらかでもジェームス・ディーンにでも似ていようなもの

ら、もう、『世紀の恋』ということになるのじゃないか？」

「あらイヤだ。でも、まあ、そんなところかもしれないね。だけど、一緒にお茶を飲んでも、確たる証拠がなければつまらないわ」

「確たる証拠だって？ おだやかじゃないね」

「つまり、相手の人が自分を好きだという気持についてのよ」

「それは、君が相手を好きでたまらない場合に？」

「いいえ、私の方は、別にどうっていうことはなくてもよ」

というわけで、彼女の場合は、自分が何の感情も持っていない男性にたいしても、一緒にたのしくお茶を飲むためには、このようなゼイタクな要求をします。この二十歳のお嬢さんの意見からゼイタクさを差引いたあたりに、私はカケヒキの対象となる「恋」を設定することにします。つまり、あなたが、「あ、あの男のひととお茶でも一緒に飲んで語り合ったら、きつと愉しいひとときが過ごせるとおもうし、もしかすると私、夢中になるかも……」という男性を見附けたとして、その男性に好意を持たれる方法、ということに限定することにしましょう。

「恋のカケヒキ」という言葉が気に入らなければ、「愛の告白の技術」とでも申しましょうか、以下箇条書きにして書いてみます。

一、追わずに追いかけさせる、ということ。——隣の花は赤い、という俚諺がありますが、とくに他人の恋人はキレイに見えるもので、その理由は、その人が自分にとって全くの未知数であるためです。だから、最初から自分の気持を露骨に示すことは禁物です。とかく男というものは、相手の女